

て、弘法大師伝説に関係する湧水が多く存在する。

名水百選に指定された多くの地では、地域開発や地域振興の名のもとに湧水地やその周辺地を整備して、多くの観光客を誘致するような施策をとる市町村もみかける。ある程度の整備や保全はやむ得ないが、大幅な改造・改修工事では自然環境の変化はまだしも環境破壊にもなりかねない側面がある。しかしながら、この四国の名水百選については、剣山御神水・湯船の水や安徳水のように自然のままの状態におかれているものもあり、いくぶん安心した感がある。

文 献

新井 正・佐倉保夫(1980)：最近の江川の異状水温について。ハ

イドロロジー, 10, 397-407.

新井 正・横島道彦(1990)：徳島県江川付近の地下水の温度と流動。地理学評論, 63(A), 343-355.

地質調査所(1992)：100万分の1日本地質図。第3版。

中国四国農政局(1975)：観音水。2p.

松山市教育委員会(1989)：松山のむかし話一伝説一。松山市文化財協会, 134-135.

澤田佳長(1992)：清流・四万十川。NHK出版, 143p.

須鎌和巳・岩崎正夫・鈴木堯士(1991)：日本の地質8・四国地方。共立出版, 266p.

平 朝彦(1990)：日本列島の誕生。岩波書店, 226p.

SHIMANO Yasuo and NAGAI Shigeru (1995): Travels of Japanese valuable waters-(9) Shikoku area.

〈受付：1994年10月3日〉

新刊紹介

「大地動乱の時代—地震学者は警告する—」

石橋克彦著

岩波新書, 1994年8月22日発行
234ページ, 定価620円(本体602円)

本書が対象としているのは、ほとんど関東・東海地域だけであるが、その指摘は、本書刊行後、半年足らずで発生した兵庫県南部地震の状況にもよくあてはまっている。東京直下地震であった安政江戸地震でも、上下動が強く、倒壊家屋が多く、死者の多くは圧死者だった。小田原地震では、交通・通信の大動脈の寸断により、全国的な社会経済の混乱をまねきかねないことを指摘している。

著者は、社会問題にも積極的に発言する日本では珍しいタイプの地震学者である。1976年に発表した「駿河湾地震説」は東海地震観測体制の進展を促す役割をした。本書では、日本の戦後復興—高度経済成長—極集中と続く時期が関東地方の地震活動静穏期にあたり、しかも人類史上かつてない技術革新の時代に一致したことを指摘している。それに対して、幕末から関東大地震までの時期は、関東地方

の地震活動が活発な「大地動乱の時代」であったという。いずれ再びくる「大地の動乱」にすぐにも備えなければならないと警告する。

近畿地方も、関東よりずっと長い大地の平和の時代下にあった。しかし、近畿地方にも過去に大地震が頻発したことが、歴史上知られており、最近では考古学的方法によっても明らかにされつつあった矢先の地震であった。

本書の第一章と第二章は、著者の該博な歴史の知識により、地震と社会の状況が生き生きと描かれている。第三章・第四章は、大地震のしくみを易しく解説しているが、それでも一般読者には難解なところがあるかもしれない。しかし、本書の主眼は第五章・第六章にあるのであろう。多少難解な部分は気にせず、多数の人に最後まで読んでいただきたい。

本書で語られていることは多いが、最後にもうひとつだけ紹介して締めくくりたい。「災害が起こったらやり直せば良い、先のことを心配しても始まらない」という日本的感覚は、世界最大の債権国となり、東京が世界中枢都市だという以上、無責任以外の何物でもない。」

(環境地質部 小出 仁)